

不定詞の意味論的再考 —— TAM-complex の視点から ——

A Semantic Review of Infinitives from the Viewpoint of TAM-complex¹⁾

佐藤芳明
Sato Yoshiaki

1. はじめに

不定詞²⁾の意味について、「未然」あるいは「未来指向」等の指摘がなされることが多いが、この種の指摘には確かに学問的裏づけがないわけではない。例えば、Bolinger (1968: 124) は不定詞が“hypothesis or potentiality”の意味合いを有すると述べているし、不定詞研究に一書全体を捧げた Duffley (1992) の *The English Infinitive* においても、「to は直後の原形が示す出来事への移行を示す」(Duffley 1992: 17) として、不定詞に未来指向的な意味を認めた上で議論を行っている。しかしながら、これらは不定詞の用法を帰納的に抽象して記述したものであり、確率論的に正鵠を射るケースが多いとは言え、不定詞の最大公約数的スキーマには到達していないように思われる。このことは、I'm pleased to meet you. 等の例からも確認される。ここで不定詞 (to meet you) が潜在的あるいは可能性の次元の事柄ではなく、実際に起きている事柄に言及しているのは明らかだからである。ここで問題となるのは、不定詞が概して未来指向的な意味合いを有すると感じられるのはなぜか。また、それが不定詞の意味論における部分的真理に過ぎないとすれば、不定詞の本質はどのように把握されるべきか、ということである。本稿では、この問題意識と対峙するにあたり、基本語のコア（本質の意味）の構文展開として文法現象を捉えるレキシカル・グラマーのアプローチを採用する。その際、特に TAM-complex (Tense-Aspect-Modality)³⁾ の視点に焦点をあてることにより、従来、徹底を欠いていた憾みのある不定詞の意味論について再考を試みることにしたい。

1) 本論文は、ALIPS (Applied Linguistics Into Practice Society) 研究会第二回例会 (2015年6月) における口頭発表「モダリティの視点による TO 不定詞理解の可能性について」の内容に基づいて執筆したものであり、学会・論文誌等では未発表である。

2) 不定詞には TO 不定詞と原形不定詞が含まれるが、本稿では、単に「不定詞」で TO 不定詞を指すこともある。原形不定詞に言及する際には、必ず「原形」と明記することとする。

3) テンス・アスペクト・モダリティ (Tense-Aspect-Modality: TAM) は、特に動詞句の文法において緊密に連携し合うことから一つの複合体的ドメインとして扱われることがある (Chung & Timberlake 1985; Givón 1990)。但し Matthews (2003) のように、英語では意味の階層性の観点から、MTA (Modality-Tense-Aspect) とするのがより適切だとの指摘もあり本稿筆者はこの見解に同意する。しかし、タームとしての認知度を考慮して TAM を採用している。尚、本稿では、モダリティの下位概念としてムード (Mood) が位置づけられるという立場を採る (Krug 2009; Mitchell 2009; Palmer 2001, 2003 等参照)。

2. 「未来指向」のTO不定詞

一般に「未来指向」とみなされている不定詞の用法には、例えば、以下のようなものがある。

- (1) a. To be or not to be; that is the question.
- b. I've decided to study abroad.
- c. My dream is to become a movie star.
- d. There is too much laundry to do in a day.
- e. He had to work day and night to support his family.
- f. She grew up to be a distinguished scholar.
- g. To tell you the truth, I broke up with him.

これらは品詞的には、名詞的 (a-c)・形容詞的 (d)・副詞的 (e-g) とされる不定詞の用法にあたる。たしかに概して、未来指向的な出来事や潜在的な状況に言及しているという点に共通性を見出すことができるように思われる。言語学的にも、TO不定詞を「未来・未然」と関連づけて論じるのは稀なことではない。既に挙げた Bolinger (1968) や Duffley (1992) 以外にも、“future” (Wierzbicka 1988: 188) ; “potential” (Downing and Locke 2006: 109) ; “some unrealized activity” (Dixon 1984: 592) 等を挙げることができる。しかし、この種の記述には相応の有効性が認められるものの、例外現象に対してはその説明力を失ってしまうということも否めない。

この点に関して、レキシカル・グラマー (佐藤・田中 2009) では、TO不定詞を概して未来指向と捉える点で軌を同じくするが、その論拠の説明力において独自性がある。すなわち、「対象と向き合って」という空間図式的意味を有する前置詞 TO が、動詞の原形を導く TO不定詞へと拡張されて、“TO + DO (動詞の原形)” は「行為と向き合って」というスキーマを獲得する。そこから、不定詞には概して未来指向の意味合いが生じると捉えるのである。



前置詞 TO のコア：「向き合って」(田中他 2003 : 1759)

このように、不定詞の TO を前置詞 TO の拡張用法と見なし、そこに意味の連続性を辿るレキシカル・グラマーの発想は、形と意味の関係に明確な根拠が在り相応の説得力を有すると思われる。このアプローチには、今ひとつの効用が認められる。それは、不定詞が必ずしも未来・未然を意味するとは限らないことも自然と了解されるという点にある。「行為と向き合って」という状況を、現在から未来を展

望する時間軸に投射しようとするときに、つまり、空間から時間への比喩的な拡張がなされる場合に、未来指向的な意味合いが生じてくる。逆に、その種の文脈的要請がない限り、そのようなニュアンスも生まれにくいということが分かるのである。

3. 「未来・未然」では理解できない不定詞の用法

「未来・未然」とはみなせない不定詞の用例をみてみよう。その典型は、以下のようなものであろう。一般に、「感情の原因」と呼ばれる用法である。

(2) I'm glad to see you here.

ここでは、I'm gladという感情が、see you hereという行為を原因として生じたと言っている。このように、感情が生じる「原因」を不定詞で示すのであれば、それがすでに起きている事態への言及であることは明らかである。つまり、この不定詞の用法は未来指向では理解できないのである。しかし、上で確認した「行為と向き合って」というスキーマであれば、ここでも適用可能である。I'm gladという「感情」を、see you hereという「行為と向き合って」生じたりアクションとして捉えることが可能だからである。リアクションとはアクションあつての応答だが、その双方向性のイメージはまさに上のTOのコアイメージから彷彿としてくる。ここでの不定詞はすでに生じた事柄を示しているものであり、そこに未来指向的な意味合いは含まれない。不定詞が未然の潜在的な事象を表すということを自明の前提にしてしまうと、このような表現は例外とならざるを得ない。しかし、不定詞を「行為と向き合って」というより抽象度の高いスキーマで捉え、その具体的な意味を文脈に応じた形で調整して把握するのであれば齟齬は生じない。このように、レキシカル・グラマーのアプローチに拠れば、前置詞TOのコアである「対象と向き合って」からの拡張用法としてTO不定詞を「行為と向き合って」というスキーマで捉えることにより、「未来指向；未然；潜在的」等の記述では説明不能に陥ってしまう用法に対しても包括的な説明力を獲得することができるのである。

3-1. V + NP + to doにおける不定詞

未来指向ではない不定詞には、以下のような用法群も存在する。

(3) a. I saw⁴⁾ him to be a liar.

b. I consider him to be quite generous.

4) 一般にseeなどの知覚動詞では、“V + NP + do”のようにNP（名詞句）に続くのは原形不定詞でありTO不定詞は受容されない。例えば、I saw him cross the street.においてto crossは容認されない。しかし、(3) aのように動詞の意味が「知覚」からある種の「判断」へシフトしている場合には、“V + NP + to do”構文が可能となる（Duffley 1992: 31）。換言すれば、身体感覚に基づくダイレクトな知覚的把握には原形不定詞が対応するのに対して、主体内の命題判断のプロセスを表すにあたってはTO不定詞が選択されるということである。

- c. We had assumed Mary to be a doctor.
- d. Mary declared John to be a fool.
- e. I believed John to have told the truth.

これらの不定詞は、動詞の後方で意味上の主語となる名詞句（NP）に後続する，“V + NP + to do”構文における用法である。不定詞に含まれる動詞がbe動詞や完了形である点も共通しているが、このことは主動詞（see, consider, assume, declare, believe）の意味とも深く関係している。いずれの動詞もある種の認識や命題レベルでの判断が関与しているからである。しかし、これらの用例は、例えば、以下の表現における不定詞とは意味の性質が異なっている。

- (4) I asked / told / ordered / forced / allowed him to call her.

(4) では、「彼 (him)」がcall herという「行為と向き合」うことが想定されている。そうなるべく、依頼、命令、強制、許可等を行うというのが動詞構文としての意味合いである。一方、例えば (3) b の I consider him to be quite generous では、「彼」がbe quite generousという「行為（状態）と向き合」うという捉え方ができないわけではない。しかし、これでは今ひとつ釈然としない。I consider him quite generous. という表現もあり得るし、その意味がto be を伴う場合と大差無いことからしても、to be で「彼 (him)」が向き合う状況を示すと考えるのは無理がある。ここはむしろ、「私 (I)」がそのような「判断」と向き合っていると捉えた方がより自然ではないだろうか。(3) a, c-e においても同様に、NP が「行為と向き合って」いるというよりも、主語がある種の「判断と向き合って」いると捉えた方が文意に適うのではないだろうか。

3-2. V + NP + to do 構文の2つの用法

上の議論が正しいとすれば，“V + NP + to do” という構文上同一の形式には、以下の2つの異なる意味を有する用法があるということになる。

- (5) “V + NP + to do” 構文の2つの用法：

- a. V + NP + to do（行為主体（通常NP）が「行為と向き合って」）
- b. V + NP + to do（認識主体（主語／話者）が「判断・認識・命題と向き合って」）⁵⁾

5) 実際には、(5) のaとbは相互排他的カテゴリーを形成するわけではなく、両者の境界線上に位置づけられるような用法も存在する可能性がある（e.g. I expect him to stay with me.などは、「行為主体 (him)」の「行為 (stay with me)」に「認識主体 (I)」の「予想」が重なっており、aとbの双方の性質を分有していると考えられる）。また、“V + NP + to do” 構文が、これら2つのカテゴリーで網羅されると主張するものでもない（例えば、I promised her to send an e-mail. で、不定詞の意味上の主語は文の主語と同じ「私 (I)」である）。しかし、これら2つの用法カテゴリーを想定することは、本稿のねらいであるTAMの視点による不定詞の意味論的再考という観点からは、相応の意義が認められるのである。

一般にあまり記述されていない (5) b の構文的特性は何であろうか。それは、「認識主体」が「判断・認識・命題と向き合っ」というところから必然的に生じてくるニュアンスである。つまり、「はたして、そう判断すべきか否か」といった断定を控えているような響きがそこに生じてくるというものである。事実の陳述をフラットに提示するのではなく、そうすることが幾分ためられるといった、逡巡あるいは言い淀みのような響きをもたらすというのが、ここでの不定詞の役割なのではないか。そう捉えると、以下の2文の相違も説明可能となるように思われる。

(6) a. I found him a liar.

b. I found him to be a liar.

(6) a では、「彼が嘘つきだ」という言明を行う「私」に、なんらためらいは感じられない。それに対して、(6) b は、にわかにそういうふうに断定するのは幾分はばかれるものの、それでもやはりそうなのだろう、といった判断を提示する際に選択される構文ではないだろうか。つまり、一般化すれば、(5) b の構文は、客観的な事実の陳述ではなく、断定を避ける類の判断文と関わっていると言えるのではないか。

事実の陳述から距離をとる判断文となると、モダリティとの関連を想起させる。不定詞は確かに法助動詞などと比較すれば、モダリティを明示的に表出するものではない。しかし、意味論的にみれば、不定詞にもモダリティ的含意が孕まれている可能性があるのではないか。実際にその意味で、Portner (2009) は、モダリティ表現に貢献する項目のひとつとして、不定詞を“covert modality” (Portner 2009: 5-6) として認めている。Narrog (2012) は、モダリティ研究を、「話し手の態度 (speaker's attitudes) / 主観 (subjectivity)」を軸に据える立場と、発話内容の「事実性 (factuality)」を中心に論ずる立場に二分し、自らは後者に軸を置いた上で、モダリティを「非事実に (実現されざる) 状況 (“non-factual (i.e. non-realized or non-actualized) states of affairs”) に言及するカテゴリー」(Narrog 2012: 6) としている。Palmer (2001) も、モダリティ概念の本質を、realis / irrealis あるいは assertion (indicative) / non-assertion (subjunctive) の対立に関連づけて論じている。この種の立場によれば、モダリティにおける議論には、「仮定」「条件」「願望」「推量」「未然」等もその射程に収まるであろう。しかし、ここでは差し当たり、上の (5) b の構文が、モダリティの議論と少なからず関係があるということを確認するに留めたい。

3-3. 受動態構文で判断を示す不定詞

この種の「判断 (意見)」を示す不定詞の用法に関して、Wierzbicka (1988) は、以下の例文を挙げて、受動態構文において最も自然であると述べている。

(7) She is thought / believed / said / alleged / reported / rumoured to be dishonest.

(Wierzbicka 1988: 46)

ここで挙げられている主動詞は、いずれも、一つの命題をめぐる、それを思考・信念・発話等の対象として操作することを表すものである。主動詞がある命題をめぐる認識や言明に言及しており、そのと

きに「判断（意見）」を示す不定詞がフィットするというのは理にかなっている。しかし、それが受動態構文において最も自然であるというのは何故か。この点を考えるにあたり、(7) の例文を以下の *that* 節を含む形に書き換えて、その意味合いを探ってみたい。

(8) It is thought / believed / said / alleged / reported / rumoured that she is dishonest.

差し当たり、(8) で得られた書き換え表現について、以下のことが言えるであろう。ここでは、思考・信念・発言・主張・報告・流言等をめぐる命題（“*She is dishonest*”）の内容が *that* 節（*content clause*）で示されている。が、誰がその命題を云々しているのかは明示されていない。つまり、その情報源がなんらかの理由でふせられている。それを明示せずにおきたいときに適した構文の選択だということになる。この最後の点については、(7) にもほぼそのままあてはまるだろう。つまり、命題内容における主語の「彼女」がセンテンスの主語（主題）として取り立てられているとしても、その命題の情報源が誰かを問題としない状況でこそ用いられる表現であろうと思われる。受動態構文である (7) (8) はいずれも、*I thought* や *I believed* で始まる文のように発話者が発言内容への責任を明示的に担う場合とは異なった情報提示の仕方になっている。つまり、(7) (8) は情報源が明示されないある命題について、発話者がその命題に対する責任を担わない形で、言ってしまうと、その真偽の判断をもペンディングにしたままで、その命題をあえて表出する構文であるということになる。そして、このような条件を満たす受動態構文で、(7) のような不定詞が噛み合うというのは、(6) b でみたのと類似した「判断・認識・命題と向き合う」といった意味合いが、そこに受身ながら自然と感得されるからではないだろうか。

また、この種の判断文的な不定詞の用法は、法助動詞を含む推量表現を彷彿とさせはしないだろうか。例えば、(7) にせよ (8) にせよ、*She may / might be dishonest.* 等の推量を含む命題と意味的に親和性が高いと感じられないだろうか。このこともやはり、ここで議論している不定詞の表現がモダリティ的な観点から分析可能であることを示唆しているように思われるのである。

4. TO不定詞の用法展開

今ひとつ、(3) a-d で注目すべき点として、いずれにおいても、*to be* の代わりに *to have been*（完了形）も文法的に受容されるという事実が挙げられる。「完了形」と言えば、時間的には過去に傾斜した事象として把握される。とすれば、一般に「未来指向；未然；潜在的」と指摘される不定詞の用例において、これほど頻繁に完了形が可能であるということは、ある種、意外なことではないだろうか。この事実を踏まえれば、不定詞においては、「（行為主体が）行為と向き合って」という理解では把握し切れない、今ひとつの用法カテゴリーの存在を想定すべきではないだろうか。ここで仮説として検討してみたいのは、不定詞の構文において、「（行為主体が）行為と向き合って」という用法に加えて、「（認識主体が）判断・認識・命題と向き合って」という用法カテゴリーが確立しているという可能性である。

(9) a. 「（行為主体が）行為と向き合って」

b. 「(認識主体が) 判断・認識・命題と向き合って」⁶⁾

このような用法の幅を想定すると、不定詞をより包括的に議論する手だてが得られることが予想される。上の仮説の有効性につき、具体例を通じて検証していくこととしたい。

4-1. 不定詞と法助動詞との類似性

そこでまず、(9) bが、不定詞のモダリティ性と深く関わっているという可能性に鑑みて、不定詞と法助動詞の類似性から検討を加えてみたい。不定詞と法助動詞の類似性あるいは関連性を示唆する主な事象として、以下のものがあげられる。

(10) 不定詞と法助動詞の類似性・関連性を示す事象：

- a. 不定詞の統語的振舞は法助動詞に類似している（いずれも動詞の原形が続き、動詞句省略（VP ellipsis）が可能な文脈がある（e.g. Yes, we can. / Why did you do that? I told you not to.）；
- b. Semi-auxiliaries（疑似助動詞；be going to, be able to, have to, be supposed to, be obliged to, be willing to）（Quirk et al. 1985: 137）は、不定詞を構成要素に含みつつ意味的に法助動詞に類似している；
- c. be to構文も、不定詞を構成要素に含みつつ、予定・義務・可能・意図等の法助動詞的な意味合いを有している；
- d. be going to やhave toに見られるように、基本動詞が後続の不定詞と結合することによって法助動詞化（文法化）のプロセスがゆるやかに展開する可能性が示唆されている。want to (wanna)；have to (hafta)；have got to (gotta)；be going to (gonna) 等の連結現象（Krug 2011: 556）に目を向ければ、書き言葉では動詞として認識されているもの（want toなど）も、口語的には既に助動詞化が進んでいることの傍証と捉えられる可能性がある；
- e. 一般に、行為遂行的用法では未来指向の意味合いを有するが、認識や判断に関する用法では、be動詞を初め状態動詞との相性がよく、完了形も許容される（未来指向的ではない）。

こうしてみると、不定詞と法助動詞には看過し難い関連性・共通性があることがわかる。本稿の主旨に沿う形で、論点を絞り込むとすれば、上記 (10) eの不定詞と法助動詞がいずれも未来指向性を帯びた

6) (9) a, bに挙げた不定詞の2つの用法は、Dixon (2005) による不定詞の分類と密接な関係がある。後者の分類では不定詞をModal (FOR) TOとJudgment TOに分けて捉えており（Dixon 2005: 52）、前者は(9) aに、後者は(9) bにそれぞれ対応する。一見、明瞭なこのDixon (2005) の2分法には問題も残されている。まず、Modalというタームは一般に判断文と連想されるが、もう一方のカテゴリーがJudgmentであることから意味論的に混乱を招く可能性がある。今ひとつ、より本質的な問題として、不定詞がModal (FOR) TOとJudgment TOの2つの用法に分けられるとしても、両用法の意味的つながりが不明である。つまり、両用法が意味的に関連のない相互排他的なカテゴリーであるかのような印象を与えてしまうのである。本稿は、同一の言語形式を有する構文には原則として意味的な関連性を認めるという立場を採る。「未来指向」と「認識判断」という不定詞の両用法のあいだにも、TOのコアに基づく「向き合って」というスキーマが一貫して作用していると捉えるのである。

用例といわば過去指向の完了形の構文を共に容認するという構文的特性について注目せねばならない。以下、完了形を容認するケースについて分析を試みる。

4-2. 法助動詞＋完了形と完了形不定詞の比較

be動詞及び完了形に相性がよいという点で、自然と想起されるのは、法助動詞の認識的 (epistemic) な用法である。以下の例を比較してみよう。

- (11) a. She seems to be / have been rich.
- b. She may be / have been rich.
- c. He is said to be / have been a nice guy.
- d. He might be / have been a nice guy.

上の例から確認できるように、不定詞と法助動詞の認識的用法のあいだには特筆すべき類似性が存している。(11) a-dでは、不定詞も法助動詞も、後続するのはbe動詞または完了形の表現である。これらは意味的には、すべてある種の判断文であり、未然の状況に言及するものはない。これらの例からもわかる通り、法助動詞と同様、不定詞の用法においても、判断文的なコンテキストでは、完了形が容認される一方、未来指向的な意味合いをもつ用法とは相性がよくない。すでに完了してしまっている事柄に対して、「～しなくてはならない」とか「～してもよい」などと行為遂行を想定した表現を行うこと自体が意味をなさないからである。それに対して、認識的 (epistemic) なレベルの問題となれば、それは今の状態に関する (be動詞等の状態動詞で表わされる) ことであれ、既に完了している (完了形で表わされる) 事態であれ、それを論じることには十分な意味が生じる。この点に関して、Mitchell (2012) が示唆に富む指摘をしている。「根源的モダリティにおいては、話し手が『潜在的行為 (potential acts)』を引き起こすことを求めるのに対して、認識的モダリティにおいては、話し手は『潜在的事実 (potential facts)』の確立を求めるものである」(Mitchell 2009: 59)。このことから、モダリティの原理的性質のひとつが確認される。すなわち、行為遂行的モダリティは完了した事態への言及を受け容れず、認識的モダリティはそれを受容するということである。この点を踏まえれば、完了形をも受容し、また、未来指向の行為ではなく状態を示すbe動詞との相性がよいということからして、今注目している不定詞の用法は、ある種の認識・判断文に関わるカテゴリーを形成している可能性が濃厚である。だとすれば、その用法の特性を究明するにあたっては、法助動詞が有するモダリティ的意味特性 (root/deontic VS epistemic) に注目することが、有力な視座を提供してくれるということになるはずである。

不定詞に、行為遂行的 (root/deontic)・認識的 (epistemic) の両用法が認められるとすれば、法助動詞との関連性を視野に収めて、不定詞をモダリティの視点から研究することに相応の意義があることを意味する。また、この両極性が生じる所以を探究すべきであるが、そのことについては差し当たり以下のように考えられる。すなわち、「対象と向き合っ」という空間的図式を有する前置詞 TO が、「(行為主体が) 行為と向き合っ」という文脈に比喩的な拡張を遂げて確立をみるのが TO 不定詞の用法だが、このとき、時間的に「行為と向き合っ」というコンテキスト関与的な意味合いを有するのが未来指向的な不定詞であり、それがモダリティの観点からすれば、行為遂行的 (root/deontic) な用法にあた

る。一方、不定詞が、ある種、判断文的な文脈で使用されることを通じて、今ひとつの用法カテゴリーが生じる。それは、「(認識主体が) 認識・判断・命題と向き合っ」という意味合いで、認識主体の判断を示すものである。後者の不定詞の用法は、行為主体の行為よりも認識主体(話し手/主語)の認識のあり様に注目したものであり、このとき不定詞は未来指向性からは解放され、むしろ、完了した事態への言及も可能となる。これがモダリティの観点からすると、不定詞における認識的(epistemic)用法に相当すると捉えられるのである。

5. モダリティの視点

モダリティの定義については、論者により多様な相違が認められ、一般に共有される定義を確認するのも容易なことではない(Bybee et al. 1994; Salkie 2009)。しかし、本稿では、モダリティを主題として論ずるのではなく、不定詞の意味論的再考において有効とみなされるモダリティの視点に注視する。そこで、先に参照したNarrog(2012)のモダリティ論における2つの軸を踏まえて、「非事實的(実現されざる)状況」あるいは「認識主体の判断」という観点にフォーカスした議論を試みたいと思う。

5-1. 行為遂行的モダリティから認識的モダリティへ

モダリティ論の中核を占めると思われる、deontic modalityとepistemic modalityの相違について、Krug(2000)が以下のように要約している。Deonticとは、「必要とされる(“that which is needed”)」「拘束(“bind”)」「必要性(“need”)」といったギリシャ語を語源とし、要するに「義務(“obligation”)」「許可(“permission”)」等の意味に還元されるとして、以下の例を挙げている。

- (12) a. I must go home now. (Mum says so.)
b. You may go home now. (School is over.)

(Krug 2000: 41)

一方、epistemicとは、ギリシャ語の「知識(“knowledge”)」を語源とする概念で、「蓋然性(probability)」「必然性(logical necessity)」「可能性(possibility)」に収斂するとして、以下を例として挙げている。

- (13) a. He should be at home. (The Super Bowl is on tonight and he wouldn't miss it.)
b. They might be in the cinema. (They talked about going this afternoon.)

(Krug 2000: 41)

(12)と(13)の例にみられるモダリティ表現は、いわば、行為遂行的なものと認識的なレベルに分岐していると言える。そして、この両様のモダリティについては、歴史的派生経路の可能性も指摘されている。行為遂行的モダリティから認識的モダリティへの展開がそれである(Bybee et al. 1994; Palmer 2001; Sweetser 1990)。命題判断に関わる認識的モダリティは主観性・非事実性の度合いが相対的に高まるという意味でモダリティ性がより強く、行為遂行的モダリティからの派生を想定するのがより自然

であるというのがその主旨である。Palmer (2001) が、特に認識的モダリティ (epistemic modality) こそ、“judgment about the factual status of the proposition” (Palmer 2001: 8) という意味において、モダリティ研究の本丸に位置づけられると述べていることからしても、モダリティのこれら2つの領域に意味論的階層性 (連続性と差異) を想定することには、相応の意義が認められるのである。

5-2. モダリティとその周辺 ―TAMの相互浸透性―

モダリティの隣接領域に、テンスとアスペクトがある。これらは緊密に連携し合って動詞句の文法を支えていることから TAM (Tense-Aspect-Modality) とも呼ばれる (注3参照)。また、TAM を包摂する領域として Auxiliarihood がある (Krug 2011)。後者は、動詞及び TAM システムに貢献する文法の他、受動態、否定、強調、節タイプ (命令文／疑問文／平叙文)、仮想 (irrealis)、Let's 構文 (adhortative)、祈願文 (optative) 等の現象も論考の対象となる。この Auxiliarihood の中で、特に、節タイプ、irrealis / realis の選択に関わるのがムードである。このムードについては、特にセンテンス単位での節構成に関わる syntactic mood (clause-type) に限定されるとして、モダリティの下位概念として位置づける立場がある (Krug 2009; Palmer 2001, 2003)。

英語には未来テンスは存在しない。テンスとは発話者が動詞の活用形によって指標する、語られる内容にかかわる時間感覚のことであり、通常、発話時と発話内容との時間の比較が動詞の語形に反映して表象される。が、英語では動詞の活用对未来形がない以上、未来テンスがないのは自明である。代わりに、本来はモダリティに関わる法助動詞 (will, shall 等) が未来を展望する文脈で重要な役割を果たしている。言語類型論的にも、未来テンスのない言語では、この種のモダリティ表現からの拡張現象が起こる傾向があり、例えば、「願望」を表す (irreal な) モーダル系動詞が「未来」を表すに至った言語として、Danish, Tok Pisin, Inuit 等がある (Bybee et al. 1994: 254)。Comrie (1976: 2) も、いわゆる「未来テンス」は、多数の言語においてモーダルの意味合いを有している旨を指摘している。これらはモダリティとテンスの密接な相互関連を示す事例とみなすことができる⁷⁾。Lyons (1977: 809-823) が、“Tense as a modality” という1章を設けて議論を行っているのも首肯されるところである。要するに、テンス・アスペクト・モダリティ (TAM) という領域は、相互浸透性が高く、これらを離散的なカテゴリーとして明瞭に論じ分けることは容易ではないということが推量されるのである (この点に関するより詳細な議論については、7-2以降で行うものとする)。

5-3. 推量における現在指向性と未来指向性

モダリティとテンスの相互浸透性を想起させる事例として、Larreja (2009) は、willan (動詞) から派生する英語の法助動詞 will がその用法を確立させるにあたって、まず内在的な「意志」が受け継がれ、次に外在的な「推量」の意味へ展開したという軌跡を辿っている (Larreja 2009: 21-23)。法助動詞 will

7) テンスをムード (モダリティ) へ拡張した例として仮定法があげられる。通常、時間軸上の現在から離れた過去の事象を表す過去テンスを、現実から離れた事象の描写に応用したのが仮定法と捉えられるからである。仮定法は、一般に、ムードの一種とされるが、その表現において法助動詞の過去形が頻用されることから、そこにモダリティとの不可分な関係性も見て取ることができる。仮定法が丁寧表現にむいているのもこの事情による。

が「意志」から「推量」へ展開するというのは理に適っていると思われる。行為主体が「意志」を有する状況があれば、そこからやがてある事態が生起するだろうという「推量」へ至るのは自然だからである。しかし、willの「推量」といっても決して一枚岩ではない。おおまかに言っても、そこには「未来指向」の推量と「現在指向」の推量があるように思われるからである。以下、その対照的な例を挙げる。

(14) 未来を指向する will :

- a. He will come to our party tomorrow.
- b. They will have arrived there by noon.

(15) 現在を指向する will :

- a. If he is not around here, he'll be in the library.
- b. They will have arrived there by now.

ここで注目したいのは、「推量」の意味を有する will であっても、それは、未来指向的な時間的経過性を帯びた推量もあれば、それとは異なり、もはや時間的推移を感じさせない、発話時における推量に焦点化された用法もあるということである。前者では、行為者の行為や出来事が生起が時間軸上に展開するものとして想定されているのに対して、後者においては、時間軸上における事象の展開という意識はもはや希薄化して、現在の状況の推量判断が前景化していると思われる。その意味で、未来指向と比較して現在指向の用法においては、行為主体の行為よりも認識主体の判断が前景化していると言えるのではないか。換言すれば、現在指向のモダリティ表現は、主観的推量性がより強く、epistemic な度合いがより濃厚な構文を形成するとは言えないだろうか。ここで想起されるのは、Narrog (2011) が Langacker (1998; 2003) の「主体化 (subjectification)」に言及して述べた以下の指摘である。現在指向的なモダリティ表現は、もはや「事実の生起 (the evolution of reality)」に関わるものではなく、むしろ「知識の生起 (the evolution of knowledge)」に関わるものであると (Narrog 2011: 78)。

6. モノ (空間的) ; コト (時間的) ; 命題 (認識的)

モダリティの分野では、「行為遂行的」あるいは「認識的」といった観点は必須の論点と思われる。これらはそれぞれ、「時間軸上に展望される出来事 (コト)」と「認識的次元で把握される命題」として捉え直すことができる。そして、これらの「コト」と「命題」に先立つ今ひとつの次元に、「空間的に位置づけられる存在物 (モノ)」を指定する存在論的な立場がある。要するに、「モノ」「コト」「命題」に関わる3つの次元が想定されるということであり、それぞれ「空間」「時間」「認識」という概念領域と対応している。以下にみる、Mitchell (2009) もこの種の考えに立つものである。不定詞の意味論的再考という主旨に適う形で、この存在論的な立場に言及してみたいと思う。

6-1. 認知的ダイクシス

Mitchell (2009) は、上記の「モノ」「コト」「命題」という3つの階層を貫く形で、ダイクシスの視点を拡張的に捉えている。ダイクシスとは、発話者が発話の「今・ここ」からの距離感を示す言語的指標に関わる概念である。まず、3つの階層の最初のレベルに、「発話の場からの距離感」を示す、通常の人称・空間ダイクシス (person deixis; spatial deixis) が位置づけられる。第二の階層で、空間から時間への拡張がなされて、「発話時からの距離感」を示すダイクシス (“temporal deixis”) が得られる。これは一般にテンスと呼ばれる現象に相当する⁸⁾。そして、第三の階層においては、空間から時間への拡張を前提に、さらに命題レベルへ展開して、「話し手／聞き手の知識・信念との距離感」⁹⁾を示すダイクシスが想定される。これが「認知的ダイクシス (“epistemic deixis”）」にあたるもので、一般にムード・モダリティと呼ばれる現象と関連するという構図である (Mitchell 2009: 64-65)。

Mitchell (2009) は、Lyons (1977: 442-443) の first order entities; second order entities; third order entities に跨がる「存在論的階層性 (ontological distinction)」の議論を踏まえて、「第一次実在 (E1: 物体)」「第二次実在 (E2: 状況)」「第三次実在 (E3: 命題)」の3つのカテゴリーに言及した上で、それらの「属性 (property)」と「領域 (domain)」について以下のように示している。

<i>Order of entity</i>		<i>property</i>		<i>domain</i>
E1s are physical objects	which	exist	in	space
E2s are situations	which	occur/obtain	in	time
E3s are propositions	which are	true	in	the mind

(Mitchell 2009: 57)

この発想を、不定詞の用法展開に応用することはできないだろうか。否、正確に言えば、前置詞 TO の拡張用法として捉えられる TO 不定詞、そして、後者においては、未来指向的な意味合いに加えて判断文的な用法が確立をみる、その展開を跡づけるべく、上記の「モノ」「コト」「命題」という3つの階層性を有するカテゴリーを応用することはできないだろうか。以下、その可能性について検討してみたい。

8) テンスが有するダイクシスの性質については、Comrie (1976; 1985) もそれを認めている。テンスは、言及される事象の時間を発話の「今・ここ」の時点に関係づけるという意味で、ダイクシス的であると (Comrie 1976: 2; 1985: 4)。

9) ここで「聞き手」が考慮されている点は説明を要する。モダリティと関連づけられるムードの本質は、節タイプ (平叙文／疑問文／感嘆文／命令文) 等の選択に、話し手と聞き手のあいだの対話状況における「知識・信念との距離感」の調整が関与するという捉え方にある。本稿の如くムードをモダリティの下位概念とする立場を採るならば、モダリティ論の徹底には、「話し手」に加えて「聞き手」の視点が欠かせないものとなるであろう。この点に関連して、Tomasello (2008) は、人間のコミュニケーション (言語のみならず「指さし (pointing)」等を含む非言語の場合も含めて) に、requesting / informing / sharing の3つの主要動機があると述べている。いずれも対話的場面における意味交渉に関わるもので、命令文・疑問文／平叙文／感嘆文という節タイプとの対応も想定されており示唆に富む。本稿では、ムードについては7-2及び8以降で具体的に言及を行う。

6-2. 前置詞TO～不定詞TOの用法展開

上の「モノ」「コト」「命題」にわたる存在論的階層性の発想を、TOの用法へ応用してみよう。TOの用法には、前置詞TOとTO不定詞が含まれる。用法の展開としてみれば、前置詞TOからの拡張用法としてTO不定詞が得られ、さらに、TO不定詞においては未来指向的な意味合いに加えて判断文的な用法が展開していくものと捉えられる。この用法展開を跡づけるにあたって、上記の「モノ」「コト」「命題」の3階層からなるカテゴリーを応用すると、以下のようになるであろう。

(16) TOの用法展開（3階層モデル）：

- a. face to face（「モノ」的次元：空間関係的）
- b. I want to go there.（「コト」的次元：未来指向的）
- c. They believe the rumor to be true.（「命題」的次元：認識判断的）

すなわち、前置詞TOの段階において「空間的」に把握されていた図式が、TO不定詞の用法においては「時間的」に拡張され、さらに「命題（判断）的」な文脈における用法へ展開していくという捉え方である¹⁰⁾。

ところで、(16) a-cに示すように、前置詞TOからTO不定詞の用法が「モノ」「コト」「命題」という存在論的カテゴリーに対応する形で理解可能であるとしたら、その意義は何であろうか。主として、以下の3点があげられると思われる。第一に、TOの意味用法展開の連続性（前置詞から不定詞へ）を傍証するデータが得られることである。それはすなわち、基本語のコア（本質的意味）に文法情報が含まれているという前提を立てて、その構文展開によって文法現象が把握されとするレキシカル・グラマーの立場を支持する事例を提供することとなる。第二に、「未来指向」から「認識判断」へという用法展開は、モダリティ研究における派生傾向（root/deonticからepistemicへ）を傍証するケースとなる可能性がある。第三点目は、動詞構文一般への応用の可能性である。(16) bの「コト」的次元、(16) cの「命題」的次元というのを、「動詞＋節構造（finite clause; nonfinite clause）」の形式を有する動詞構文へ応用した場合に、興味深い論点が浮上してくる可能性が考えられるのである。

10) 3の例文(2)でみた「感情の原因」におけるTO不定詞などは、(16) bの「未来指向的」用法には収まらず、むしろ、(16) aの「空間関係的」イメージを維持しつつ、ある状況と「向き合って」生じた感情的リアクションを示す用法と捉えられる。また、「未来指向」のTO不定詞には“V + NP + to do”の構文も含まれるのは、3-2で確認した通り。一方、“V + to do”の構文でも、「未来指向」の不定詞を従えるとは言い難い動詞群が存在する。seem, appear, turn out, prove, happen, chance, tend等がその代表格である。これらの動詞に続く不定詞については、「外見に基づく判断」(seem; appear), 「新たな認識」(turn out; prove), 「予期せぬ発見」(happen, chance), 「正当化され得る想定」(tend)等の意味合いが含まれている(Wierzbicka 1988: 58)という意味で、(16) bよりも(16) cに傾斜した用法とみなすことができる。

7. 動詞構文への一般化

動詞構文一般への言及は、本論の主旨からすると派生的議論となる。が、不定詞の意味論的再考と不可分の関係性も認められるので、以下、要点に絞ってふれてみたい。

「コト」の次元と「命題」の次元を、動詞構文一般に応用するとは具体的にどういうことか。例えば、tell という動詞を例にとると、tell him to come with me であれば、ある種の「コト」に言及しており、tell her that I love her であれば、ある種の「命題」に関わっているということになる。ask であれば、ask her to dine with me はある種の「コト」に言及し、ask him why he was late なら「命題」（ただしここでは理由に関する未知情報を含む節情報）が関与していると捉えられる。また、recommend には、recommend him to join the project 等のように「コト」として表現する方法もあれば、recommend that he (should) join the project のように「命題」を差し出すことにより提案に代える用法もある、等々のケースが考えられる。

このような動詞構文の捉え方をさらに一般化して、不定詞のみならず分詞を加え、that 節のみならず wh- 節を加えて、「コト」に言及する動詞構文、「命題」に言及する動詞構文を想定することができるのではないか。

7-1. 動詞構文における「コト」VS「命題」

一般化を試みるとすれば、「コト」の構文は時間的に把握される事象に関わるものであり、「命題」の構文は認識・判断・発話・信念等への言及がなされるものである。この対比を踏まえて、動詞構文に限れば、以下のように位置づけることができるであろう。

(17) a. 「コト」に言及する動詞構文：V + (NP+) to do / do / doing / done

b. 「命題」に言及する動詞構文：V + (NP+) that-clause / wh- clause

上記2つの構文には、以下のような形態的・意味の特徴が認められる。(17) a のように、nonfinite clause (テンスをもたない非定形動詞（「準動詞」とも呼ばれる）を含む節）が動詞に続く場合には、ある事象の時間的な把握が求められるのに対して、(17) b のごとく、動詞に finite clause (テンスをもつ定形動詞を含む節) が続く場合にはなんらかの「命題」を論ずる表現となる（that 節は「～ということ」となる命題節一般に対応し、wh- 節は「～かということ」という具合になんらかの未知情報を含む節にあたる）。

本稿の主題となった不定詞の2つの用法カテゴリーを、(17) a, b の動詞構文に照らして位置づければ以下になるだろう。いわゆる「未来指向」の不定詞は、(17) a の「コト」に言及する動詞構文における to do にあたる。一方、「認識判断」の不定詞は、(17) a には収まりきらず、むしろ、(17) の a と b の両構文の中間に位置づけられるものではないか。というのは、「認識判断」の不定詞は、形式的には (17) a のカテゴリーに留まりながらも、意味的には (17) b の領域に浸食しつつあると思われるからである。この見解が正しいとすれば、やはり、「認識判断」の用法は不定詞においては有徴項的カテゴリーと言ってよいであろうし、そのことが従来、「認識判断」の用法が「未来指向」と比較して十分に記述されてこなかった理由の一端となっているのではないかとも思われるの

である。

7-2. アスペクトの視点による TO 不定詞／原形不定詞の差別化

(17) a)において、「コト」の構文を捉えたが、その中には、不定詞と分詞が含まれていた。それぞれの構文の差別化はどのように図るべきであろうか。to do / doing / doneの意味を言語形式に基づいて比較したときに、それぞれ、「未来指向」「現在指向」「過去指向」の意味合いをもつと捉えられるのではないか。不定詞の「未来指向」は本稿の主題に関わることであったが、後二者については「現在分詞」「過去分詞」というタームとの連想が意味をなす。ただし、この「現在」「過去」というのは、テンスとの対応を直接的に示すものでないことは確認しておくなくてはならない。Comrie (1976) は、英語の分詞が「相対的テンス (relative tense)」を有する旨、以下の例をあげて説明している。

- (18) a. When walking down the road, I often meet Harry.
b. When walking down the road, I often met Harry.

(Comrie 1976: 2)

ここで、(18) aとbにおける現在分詞 (walking) がそれぞれ現在と過去の事象を示すと理解できるのは、いずれも主動詞 (meetとmet) のテンスと関連づけることによる。このように言及される事象が発話時点と関係づけられるという意味で、確かに、この種の判断はテンスの領域に属する問題とみなされるべきものである。とは言え、当該の動詞の活用形自体で明示されることなく、あくまでも主動詞との関係によって判断されるという意味で、この分詞のテンスは「絶対的 (absolute)」ではなく「相対的 (relative)」である (Comrie 1976: 2)。この「間接的テンス」に関する議論の主旨は、現在分詞のみならず過去分詞にも、また、不定詞にもあてはまるものであろう。

しかし、ここで以下の点は、明確にしておかなくてはならない。間接的とは言え、「現在／過去」の判断がテンスの問題であるのに対して、walkingが「未完了」の進行状態を示しているというのは、ひとつの事象内に収まる時間性的の問題であるという意味でアスペクトに属する問題である。アスペクトについては、一般に、事象の「開始」「継続」「終了」等の側面に注目する概念として理解されている。テンスとアスペクトの相違については、Comrie (1985) のダイクシスの視点による指摘が目を引く。発話地点にモノ・コトを関係づけるのがダイクシスであるという意味で、テンスは時間的ダイクシスとみなすことができるが、アスペクトは事象内の時間的側面に関わる問題であり、他の時間と関連づけられないという意味で非ダイクシス的であると (Comrie 1985: 14; 6-1 及び注8も参照)。この指摘を踏まえれば、(17) aに含まれる不定詞・分詞については、主動詞との関連において時間性を論ずる際には、「間接的テンス」の議論が可能となる一方で、主動詞との関連性をいったん捨象して、その非定形動詞構文自体が表象する時間的側面に注目すれば、アスペクトに焦点化した議論が可能となると言えよう。

ここで、(17) aの動詞構文に現れる分詞のアスペクトに注目すれば、現在分詞 (未完了・進行)／過去分詞 (完了) といった対応関係を見出すことができる。では、不定詞のアスペクトについては、どう捉えたらよいか。TO不定詞と原形不定詞をアスペクトの観点で比較した場合、語形の相違に基づく意味の相違が予想される。さしあたり、以下の疑問文の比較を通じて、現在分詞・過去分詞と対比させる

形で、原形のアスペクトについて考えておきたい。

- (19) a. Are you doing it?
 b. Have you done it?
 c. Could you do it?

(19) a, b では、are と have がそれぞれ文頭に出て、ムード（疑問文）とテンス（現在）を示しつつ、後続の分詞（doing/done）でアスペクト（未完了（進行）／完了）を示している。これらに対して、(19) c では、法助動詞 could が文頭に出て、ムード（疑問文）とテンス（過去）が示されている（ただし、この could は時間的な過去を指向するよりむしろ事実性からの心理的距離感を示すという意味でモダリティに応用された過去テンスである（5-2及び注7参照））。では、後続の原形が示すアスペクトはどうか。ここでの原形（do）が、「進行」でも「完了」でもないのは言うまでもない。語形から判断すれば、アスペクト的には「行為の全体（始終）」が示されていると捉えるのが自然であろうと思われる。

(19) a-c にみられるように、疑問文というムードは、分詞や原形のアスペクトについて考察するのに適した形である。それは以下の事情による。疑問文では、be / have / do / 法助動詞（いずれも「助動詞」とされる）が文頭に出る。その倒置によりムードが示されるのと同時に、助動詞の活用形によりテンスが示され、さらに、法助動詞の場合にはそこにモダリティが含意される。一方、後続の分詞や原形は、ムード・モダリティ・テンスの表示機能を帯びずに、アスペクトが前景化する形になる。そこで、(19) a-c にみられるように、「現在分詞（進行）」「過去分詞（完了）」「原形（行為の全体（始終））」という対応関係が浮き彫りになるのである。

この議論を、(17) a 一般に応用し、アスペクトに焦点化したまま、原形不定詞と TO 不定詞の相違について考察するとどのようなことが言えるだろうか。TO 不定詞と原形不定詞の相違は、TO の有無に還元される。原形不定詞は、動詞の図式をいわば素のまま提示するものである。TO 不定詞が「行為と向き合って」というスキーマを有することから、「未然」のアスペクト性を帯びる傾向があるのに対して、原形不定詞は TO を欠いていることから、「向き合って」という意味成分が無化されて、「行為そのもの」が前景化する。分詞や TO 不定詞との相違を踏まえれば、原形不定詞はアスペクト的には「行為の全体（始終）」を表すと言えるのではないか。そう捉えれば、以下の例にみられるような知覚動詞に続く原形不定詞の存在意義も明確になるように思われる。

- (20) a. I saw him cross the street.
 b. He was seen to cross the street.

(20) a で、cross が to cross となっていたならば、そこには「行為と向き合って」という図式から「未然」のアスペクト性が前景化してしまい、「彼が道を渡る」のを実際に目にしたという意味を表し難い。逆に、to を伴わない原形であるからこそ、「行為の全体（始終）」を目にするという意味を表すのに適しているのである（ちなみに、crossing であれば、「行為の未完了（進行）」が意識され「渡っている最中」がイメージされる）。

この点に関して、(20) aの知覚動詞 saw と原形不定詞 cross との間に「同時性 (coincidence)」¹¹⁾ が感得されるという指摘がある (Duffley 1992: 29)。「同時性」とは主動詞と不定詞が示す事象のあいだの時間的なズレの無さを示すものであり、2つの事象の時間性の比較が想定されているという点で、上でふれた間接的テンスの議論ともつながっている。しかし、この「同時性」も、TO不定詞であれば一般に「未然」のニュアンスを帯びることから、主動詞とTO不定詞が示す事象とのあいだに時間的なズレが想定されるのに対して、原形不定詞においては「行為の全体 (始終)」がカバーされるために、そこに時間差が感じられない ((20) aで言えば、「見る」という行為と「道を渡る」という行為が時間差のない形でオーバーラップする) ことを強調した表現とみなすことができる。その意味でここでも、原形不定詞がアスペクト的に「行為の全体 (始終)」を表すという捉え方が前提となっていると言って差し支えないと思われる。

7-3. モダリティの視点による TO不定詞／原形不定詞の差別化

本稿では、不定詞の意味論を再考するにあたり、モダリティを含むTAM (Tense-Aspect-Modality) に注目してきた。この概念複合体は相互に折り重なるように輻輳し合っており、不定詞の意味論においても複数の有効な視点を孕んでいる。分析の対象や焦点のあて方によって、その有効な視点もシフトする。不定詞の意味論は、「未来指向」と「認識判断」系の用法をもつという意味で、法助動詞 will との親和性も認められ、そこにテンスと隣接するモダリティ的意味特性を観てとることができる。また、判断文的な不定詞の身分をめぐることは、特に認識的モダリティの視点が有効である。さらに、(17) aのような「コト」に言及する動詞構文におけるTO不定詞と原形不定詞の相違に注目すれば、上にみたように、テンス中立的なアスペクトの視点を前景化させる方向も考えられる。さらに、このTO不定詞と原形不定詞の識別については、以下にみるように、再びモダリティの視点に立ち返って、不定詞の形式におけるTOの有無をモダリティ的意味特性の有無に還元して考える、という発想も有効となるように思われる。

TO不定詞と原形不定詞の差別化に絞って論ずるならば、アスペクト的な視点にせよ、モダリティ的性質にせよ、すべてはTOの有無に起因するものである。TOがあるからこそ生じるモダリティ・アスペクト性、これがTO不定詞の意味特性にそなわっているのではないか。逆に言えば、原形不定詞は、TO不定詞が有する類のモダリティ・アスペクト性が不在であるということを明示する言語的形式なのではないか。

上の7-2でアスペクト的観点からの分析を試みたので、以下、モダリティの視点から、TO不定詞／原

11) Duffley (1992) は、have 等の使役動詞の用法に対しても、同主旨の指摘を行っている。使役動詞 have が示す「経験」と後方の原形不定詞が示す「経験される出来事」のあいだの「時間差のなさ (the absence of a before/after relation)」が、原形によって表象されると (Duffley 1992: 22)。その上で、原形不定詞は、一般に、「経験と被経験の完全な同時性 (complete coincidence in time between two events — experiencing and the experienced)」を表すとしている (Duffley 1992: 23)。本稿筆者の見解では、「同時性」で把握できるのは、知覚動詞・使役動詞に続く原形の用法に限られる。これら以外に原形には、未然の行為の遂行を促す用法、法助動詞一般に続く用法があるが、これらは「同時性」では説明できない。原形全般に通ずるスキーマとしては、原形のアスペクト性としての「行為の全体 (始終)」がより高い汎用性を有しているように思われる (8-2の論点参照)。

形不定詞の差別化について考察してみたい。ただし、モダリティには、行為遂行（未来指向）的モダリティと認識的モダリティがあるという想定に立つものとする。また、これら両様のモダリティのうち、行為遂行的モダリティは、未来指向という時間性の判断において間接的テンスの議論との関連性を有しており、7-2で見たように、その判断には不定詞のアスペクト性が前提としてはたらいっている可能性がある。これらの点を踏まえた上で、改めて、(20) aの原形不定詞と(20) bのTO不定詞を比較してみよう。(20) aにおいては、主動詞sawと原形不定詞crossは「同時的」であり、そこには時間的な格差は感じられない。つまり、「未来指向性」は認められない。そして、その種のモダリティの欠如をTOの不在で示すべく、原形が選択されていると捉えることができる。一方、(20) bでは、受動態構文が選択されていることに伴って、直接的な「知覚」から、ある種の「判断」へと、動詞句の意味がシフトしている（注4参照）。つまり、受動態構文では、認識的モダリティが有標的になっている。そのため、不定詞においても、そのモダリティを示すべく、TOを伴った形が選択されていると理解することができるのである。

(21) 知覚動詞に続く不定詞の用法：

- a. 能動態：do（同時的）…… 未来指向的モダリティ（-）
- b. 受動態：to do（「知覚」から「判断」への語義シフト）…… 認識的モダリティ（+）

このようにTO不定詞か原形不定詞かの選択は、ON / OFFの二者択一であるケースが一般であるが、その判断の根拠として、未来指向性あるいは認識判断的といったモダリティが認められるときにTO不定詞が選択され、そうでない場合には原形不定詞が選択される、という一般原則を立てることができるのではない¹²⁾。従来、TO不定詞／原形不定詞の選択原理については、意味論的な説明は十分になされてきていないように思われる。しかし、この問題についても、TO不定詞が有する、否、厳密にはTO不定詞のTOが有するモダリティに着目することで、糸口がつかめてくるのではないだろうか¹³⁾。

12) Mitchell (2009: 69) は、make, let, have等の使役動詞、see, hear, feel等の知覚動詞は、他動詞構文として原形不定詞を従えるが、使役動詞は行為遂行的モダリティ、知覚動詞は認識的モダリティの意味合いを有している、という主旨の指摘を行っている。原形不定詞を導く主動詞の意味論として興味深い。この指摘が正しいと仮定した場合、先行する使役動詞や知覚動詞がモダリティにおいて有標的であるために、それに続く不定詞においてその意味機能が重複しないようにモダリティをゼロ（無標）化するシステムになっている、と換言することができるかも知れない。

13) needとdareに関して、肯定文では動詞の用法としてTO不定詞を従えるのに対して、否定文では助動詞として原形不定詞を従えるという用法の特徴がある。この現象は、needとdareに限らず、ought (to)においても英米の若者のあいだで観察されとの指摘もある(Quirk et. al. 1985: 139)。ここでのTO不定詞／原形不定詞の差別化も、モダリティ性をもつTOの有無に還元することで解明の糸口が見えてくるのではない。例えば、needであれば、肯定 (need + to + do) におけるneedとdoの2つの事象の時間差の意識（未来指向的モダリティ）がtoの必要性につながり、否定 (need + not + do) では、「否定」の中に「未然」が既に含意されているために、toを伴わない原形が選択されるという捉え方ができる。この種の現象も、不定詞の意味論におけるTAM-complex (Auxiliarihoodとも関連した概念複合体) への着眼が、新たな論点の浮上をもたらす可能性を示唆しているように思われる。

8. ムードの視点からみた原形不定詞の特性

最後に、原形不定詞に固有の用法として一般に知られている「仮定法現在」と呼ばれる現象についてふれておきたい。原形不定詞のみにみられる用法であるから、TO不定詞の意味性質の究明には直接的に貢献するものではないかもしれない。しかし、原形特有の用法からその意味特性を浮上させることによって、そこから立ち返ってTO不定詞の性質を捉え直すことにもつながり、以て、不定詞全般の理解が深まることも期待される。私見では、この用法はムードの視点をも考慮して捉えることによって初めてその本質が見えてくる。以下の例で考えてみよう。

- (22) a. She demanded that he stop smoking.
 b. He suggested that the meeting be postponed.
 c. God bless you.
 d. Somebody help!

8-1. 命令法の応用としての原形

(22) a-dにみられる原形の用法は、文法書などでしばしば、「仮定法現在」として分類記述されている。今、このターム（呼称）の適否について検討を加えてみたい。というのは、そのことが原形用法の理解の本質を問いただすことにつながると思われるからである。まず、ここでテンスを「現在」と捉えるのは問題がある。というのは、例えば(22) aで、現在テンスであれば伴うはずの「三単現」の“s”がつかっていないし、(22) bの“be”も、現在であれば“is”となるべきところだからである。要するに、(22) a-dにおける「原形」は「現在形」ではないという、語形からみて当然のことがここで確認されるのである。次に、「仮定法」と呼ぶのはどうか。これらを仮定法と呼ぶ理由があるとすれば、それは以下のようなロジックであろう。事実をありのままに述べる「直説法 (indicative mood)」に対して、事実ではない事柄をテンスをシフトさせることによって表現するのが「仮定法 (subjunctive mood)」であり、(22) a-dは後者に相当すると。しかし、一般に仮定法においてテンスをシフトさせる場合は過去形が用いられる（過去完了もアスペクトは完了だが、テンスは過去に属する）。ところが、上の例はいずれも過去形ではなく原形である。ここでこれらの原形が使われる意味的な動機づけ (semantic motivation) について再考する必要がある。

結論を先取りしてしまえば、ここでの原形は、「命令法 (imperative mood)」の応用と考えられる。命令法は、通例、眼前の相手に対して、まだなされていない行為の遂行を求める際に使われるムードである。その文脈から自然と、眼前の相手が（2人称）主語として想定されるために、それが言語形式的には明示されないのが常態である。ここで主語の問題はさておき、「未然の行為の遂行を求める」という状況で「原形」が使われるという点に注目してみよう。すると、(22) a-dの例は、すべてその条件を満たしていることがわかるのである。例えば、(22) aであれば、“Stop smoking.”といった発話が実際になされるような状況を容易に想像できる。(22) dでは、もし“helps”としてしまったら、意味的には習慣的な事実への言及となってしまっていて、誰も慌てて助けに来ようなどと思わないかもしれない。原形だからこそ、今その行為が求められているということが明示されるのであり、その主語がたまたま眼前に明

示可能な形で存在していないということに過ぎないのである。(22) cにしても同様であり、神への「命令」と言うと違和感があるかもしれないが、それは「命令」という語感にまつわる問題であり、「未然の行為の遂行を求める」相手がたまたま神的存在であったと捉えることが可能である。

Krug (2009) は、imperativeの用法には、通常の2人称主語に加えて、1人称における“Let's ~”という形式 (adhortative) と、(22) にみられる類の3人称の用法 (jussive) があると指摘している。そして、adhortativeを中心的論題として、モダリティを最上位に置いた上で、以下のような包含関係を示している。

(23) adhortative \supset imperative \supset syntactic (non-indicative) mood \supset modality

(Krug 2009: 319)

この図式を挙げたのは、命令法は2人称に限られるものではないという主張に相応の理論的根拠が存在することを示すためである。しかしまた、(23) の包含図式をより大きな視点から見れば、ここでの議論の帰趨がムードという概念をいかに把握するかにかかっているということも確認できる。Krug (2009) によれば、モダリティに包摂されるムードからは直説法が排除され (モダリティを程度 (degree) の問題として扱えば排除する必要はないかもしれないが)、仮定法と命令法がそこに収まる。その両者のうち、命令法においては人称に制限のない用法的な広がりがあるということである。

ここでの議論から、原形について以下のことが確認できる。原形には命令法的なコンテキストにおいてこそ生じる用法が存在するということである。そして、この原形は、対話的な状況における意味 (意図) 調整という要請に縛られているために、語形の変化がなく、その意味でテンス不在である。テンス不在であるが、意味的には未来を指向している。それこそが、命令法の意味世界であると言ってもよいかもしれない。「未来指向」と言うと、TO不定詞と共通しているかのような印象を与えるかもしれない。しかし、(22) a-dのような原形における未来指向性は、あくまでも命令法的なムードの要請があって生じてきているものである。今ひとつ、原形が未来指向の意味合いを有する主な用法がある。それは、法助動詞に続く場合である。その用法 (特にdeonticな法助動詞に続く場合) は、命令法における原形とつながっているのではないか。たとえば、(22) a, bでは、原形の前にshouldを補っても意味的に大きな違いを生まない。そのことは、命令法的な原形とdeonticな法助動詞に続く原形が意味特性的に近似していることを示唆している。いずれも、「未然の行為の遂行を求める」という対話的状況がコンテキストとして想定された場合の原形であり、ここにムード (imperative) とモダリティ (deontic) の連続性を見出すこともできよう。

8-2. 原形の主な用法とスキーマ

ここで、原形の用法について整理しておきたい。これまでの議論を踏まえると、原形にはまず以下の2つの用法があることが確認される。一つには、ムード (imperative) またはそれと連続性を有するモダリティ (deontic) の要請から生じる原形であり、今ひとつは、7-2と7-3でみたような、TO不定詞と対比的に捉えられる原形の用法である。前者は対話的な文脈から生じる行為遂行を求める「未来指向」の原形であり、後者はTOを伴わない原形により未来指向性を帯びずに「同時性」を前景化させる用法で

ある。

これらに加えて、看過できない原形の用法があるとすれば、それは助動詞doと共起するケースであろう。「疑問」「否定」に加えて「強調」の機能を有する用法であり、以下がその例である。

(24) a. Do you know him?

b. I don't know him.

c. I do know him.

ここでみられる助動詞のdoについては、一般に、疑問文、否定文といった節タイプ（モード）を明示するのが主な機能であると考えられている。この点について、Mitchell (2009: 71) は、「疑問」「否定」「強調」と呼ばれる助動詞doの用法は、いずれも事実の確定（命題の事実性にかかわる認定）をめぐる提示される言語形式であるという点で、epistemicなモダリティに関わるものであり、その意味でdoも法助動詞の一種として認められると述べている。特に、(24) cのような「強調」のdoは、対話的場面において、「反論 (counter-assertion)」、「同意 (agreement)」、「譲歩 (concession)」、「驚きの表明 (exclamation of surprise)」等の対話的意図を有するものであり、「疑義に晒された確実性 (questioned certainty)」が問題となっているコンテキストにおける用法であるとしている (Mitchell 2009: 71)。

ここで、(24) a-cの原形の用法を改めて観察してみると、以下のことが指摘できる。(24) a-cは、どれも原形に先立つ助動詞doが、疑問・否定・強調といった広義における（対話的視点も考慮した）認識的モダリティ（注9参照）の表示機能を有している (Auxiliarihoodとの関連も想定される) のに対して、それに続く原形 (know) は、テンス・モダリティの表示機能を帯びることなく、アスペクトにおいて「行為そのもの」を示している。すなわち、「行為の全体」である。このように原形がアスペクト的に「行為そのもの（行為の全体）」を示すという理解の仕方は、実は、法助動詞一般に続く原形の用法にもあてはまるものである。それが未来指向的であれ認識的であれ、未然であれ已然であれ、肯定であれ否定であれ疑問であれ、行為全体が想定されるという点は共通しているからである。

では、これらの原形の用法を抽象し得る最大公約数的なスキーマを想定するとすれば、それはどのようなものか。命令法に関連する未来指向性を帯びた原形、認識的モダリティを有する法助動詞に続く原形、そして、知覚動詞等続く同時性を前景化させる原形。これらの用法を抽象化し得る原形の共通の意味合いがあるとすれば、それは何か。「未来指向性」は、命令法のモードやそれに連なるdeonticモダリティの要請が必要である。「同時性」は、知覚動詞や使役動詞との共起があつてこそ生じるものであり、その種の文脈的制約を受けるものである。これらに対して、アスペクトに焦点化した「行為の全体（始終）」という捉え方は、原形不定詞のもつ意味あいとしてより一般性を有するのではないか。その原形がモード・モダリティ等の変数によって意味合いを変容させると捉えるのである。一つには、モード (imperative) あるいはモダリティ (deontic) が変数として関与する場合には、「未来指向」の原形となる。しかし、そこでも「行為の全体（始終）」が求められていると捉えることが可能である。また、認識的モダリティを帯びた法助動詞一般と共起する原形があるが、そこでは法助動詞がモダリティ的含意を示すのに対して、原形は「行為の全体（始終）」というアスペクトを示すと捉えられる。さらに、原形には、(20) aのような知覚動詞等続く「同時性」を帯びた用法がある。その際には、“V + NP + to

do / do” の構文において、TO不定詞／原形不定詞が相互排他的に選択されるシステムとして捉えられる。ここでの原形不定詞は、TO不定詞（「行為と向き合って」）からTOの「向き合って」を差し引いた原形の意味合い（「行為そのもの」）によって特徴づけられる。要するに、これらの原形の用法はいずれも、「行為の全体（始終）」というアスペクト性によって把握可能となるものである。

9. おわりに

本稿では、不定詞の意味論的再考にあたり、TAM-complexの視点に注視し、TO不定詞には、行為遂行的な文脈で未来指向的な意味合いを帯びる用法があるのに加えて、命題判断的な含意をもつより拡張的な用法が存在することをみてきた。また、「モノ」「コト」「命題」という3階層モデルを応用することで、前置詞TO（空間的）から、TO不定詞の未来指向的用法（時間的）さらには認識判断的用法（命題的）への展開が跡づけられることをみてきた。この発想を、「コト」に言及する動詞構文と「命題」に言及する動詞構文に应用することで、動詞構文の理解に新たな視座が得られる可能性があり、特に、「コト」に言及する動詞構文においては、TO不定詞と原形不定詞の差別化について、アスペクトおよびモダリティの視点から従来十分に指摘されてこなかった意味的動機づけに関する議論が可能となることが示唆された。さらに、原形不定詞の意味特性の分析においては、ムードの視点が有効性をもつケースがあることが例証された。TAMは混成態的ドメインであり、明確な領域の確定やタームの定義も容易ならざる作業ではある。が、言語が絶えず変化してやまない生きた現象であるという実相に照らせば、今後の言語研究において不可欠なパースペクティブとして浮上してくる可能性もある。本稿は、その視座を不定詞の意味論的再考にあてがった初期的な試みに過ぎない。萌芽の如く提示された種々の論点の精緻化作業が今後の課題として残されているからである。

参考文献

- Bolinger, D. 1968. "Entailment and the meaning of structures." *Glossa* 2(2), 119–127.
- Bybee, J., Perkins, R., and Pagliuca, W. 1994. *The evolution of grammar: Tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, B. 1976. *Aspect*. New York: Cambridge University Press.
- Comrie, B. 1985. *Tense*. New York: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W. 1984. "The semantic basis of syntactic properties." *BLS* 10, 583–595.
- Dixon, R. M. W. 2005. *A semantic approach to English grammar* (2nd ed.). New York: Oxford University Press.
- Downing, A. and Locke, D. 2006. *English Grammar: A University Course* (2nd ed). New York: Routledge.
- Duffley, P. J. 1992. *The English infinitive*. New York: Longman.
- Krug, M. G. 2000. *Emerging English modals: A corpus-based study of grammaticalization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Krug, M. G. 2009. "Modality and the history of English adhortatives." In Salkie, R., Busuttil, P., and van der Auwera, J. ed., *Modality in English: theory and description*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Krug, M. G. 2011. "Auxiliaries and grammaticalization." In Narrog, H. and Heine, B. ed. *The Oxford handbook of grammaticalization*. New York: Oxford University Press.
- Larrea, P. 2009. "A typology of modality." In Salkie, R., Busuttil, P., and van der Auwera, J. ed., *Modality in English: theory and description*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lyons, J. 1977. *Semantics 2*. New York: Cambridge University Press.

- Matthews, Richard. 2003. "Modal auxiliary constructions, TAM and interrogatives." In Fachinetti, R., Krug, M., and Palmer, F. ed., *Modality in contemporary English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Mitchell, K. 2009. "Semantic ascent, deixis and intersubjectivity." In Salkie, R., Busuttil, P., and van der Auwera, J. ed., *Modality in English: theory and description*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Narrog, H. 2012. *Modality, subjectivity, and semantic change: A cross-linguistic perspective*. New York: Oxford University Press.
- Palmer, F. R. 2001. *Mood and modality* (2nd ed.). New York: Cambridge University Press.
- Portner, P. 2009. *Modality*. New York: Oxford University Press.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Tomasello, M. 2008. *The origin of human communication*. New York: The MIT Press.
- Wierzbicka, A. 1988. *The semantics of grammar*. Amsterdam: Benjamins.
- 佐藤芳明・田中茂範. 2009. 『レキシカル・グラマーへの招待 新しい教育英文法の可能性』東京：開拓社.
- 田中茂範・武田修一・川出才紀編. 2003. 『Eゲイト英和辞典』東京：ベネッセコーポレーション.



佐藤 芳明 (Sato Yoshiaki)

所属：獨協大学外国語学部交流文化学科非常勤講師

専門：認知言語学・応用言語学

Email : misa228yoshi@gmail.com